

カントとハイデガー -近世哲学におけるヘノロジーの役割-

福谷 茂(京都大学)

カントとハイデガーを比較することはこれまでもさまざまな仕方で試みられてきている。しかしハイデガーに2冊のカント書がある以上、それらの試みはどうしてもハイデガーから見たカントの位置付けという性格を持ってしまうことは避けがたかったように見える。そこで今回はカントとハイデガーのどちらにも偏しない観点として〈ヘノロジー〉を選び、この観点から両者を比較するとともに、近世哲学史における〈ヘノロジー〉という概念の有効性を検討したい。

まず必要なのは〈ヘノロジー〉というターム自体の説明だろう。『ヘノロジーとオントロジー』(キュルステン)、*「形而上学はオントロジーに限られるか」*(クルバリツィス)というような書名や論文名を見かけることからわかるように、今日の文献においては、〈ヘノロジー〉(henology、Henologie)というタームは形而上学において〈オントロジー〉と絡み合い、補完しあうものとして使用されはじめている。しかしまだ定着したとはとても言えないからである。

そもそも、形而上学とオントロジーとは決して相蔽う概念ではない。〈形而上学〉は古い由緒を持つ概念であるが、オントロジーのほうは第2スコラ哲学によって行われた形而上学の再編成が生み出した17世紀初めの造語である。言いかえると、オントロジーは近世初期の哲学的関心と問題状況を如実に反映しているとともに、またそれによって射程をあらかじめ制約された概念である。それがその後の近世スコラ哲学およびヴォルフを頂点とするドイツの講壇哲学において〈制度〉化されアカデミズムに広く伝播することによって、ホブズボームの言う意味での〈伝統の発明 invention of tradition〉が達成された、というのがオントロジーというタームが哲学において市民権を得た事情である。かなり雑多な内容を含む〈形而上学〉といういわば緩さを本領とする概念の、オントロジー＝〈存在論〉というリジッドなシステムへの変貌あるいは脱皮が近世哲学の成立の背景であり、ライプニッツやカントの思惟にとって背景をなす事情である。現在みられるような形而上学とオントロジーとの同義語化という事態は上にふれたように形而上学に対して、第2スコラ哲学、とくにスアレスによって行われた〈純化〉によって生じたが、これを内容的に捉えるならば、むしろ後発の〈オントロジー〉による〈形而上学〉の乗っ取りともいべき事態が起こったということにほかならない。

この〈純化〉によって失われたものを取り戻そうとする試みが、20世紀も後半になって造語され、20世紀の最終局面になって本格的に使われ始めたヘノロジーという概念である。ヘノロジーは語の形としてはオントロジーと同じで、オントロジーが存在論であるならば一者論とでも訳すべきものである。もとより「一」、あるいは「一と多」が形而上学の核心のひとつであるということは広く承認されていた。しかし、ここで言う「ヘノロジー」は「一」あるいは「一と多」の問題が形而上学にとって a problem ではなく、the problem であるという主張を端的に表現するために使われ始めたとみていいだろう。そして「一」がとりわけ新プラトン主義のテーマであったため、この主張は新プラトン主義の解釈と再評価、そして哲学史上の位置付けのやり直しという形をとってくる。形而上学ははじめから「一」がテーマであり、「存在」の問題は二次的・後発的だという形而上学についての別の見方とし

て、パルメニデスからプロクロスまでの視野が例えばジョヴァンニ・レアーレやバイアーヴァルテスによって開かれている。またこの観点からすると、「一」から「存在」へのずれが生じたのはアリストテレスにおいてであると捉えられるのに対しては、クルバリツィスがアリストテレスそのものでも『自然学』にはヘノロジーのロジックが隠されていることを主張してヘノロジーの優位性を説いている。

このようにヘノロジーは今まで古代哲学と中世哲学の研究において現れてきた。それを近世と現代の哲学にも延伸することができるというのが本発表の狙いである。具体的にはカントとハイデガーにおいて読み取ることができ、それによって両者の連関と相違とが浮かび上がる、というのが発表者の主張である。

上記のような文脈を踏まえると、カント研究者にとって直ちに念頭に浮かぶのは『純粋理性批判』の超越論的演繹論である。ここでのカントは徹底的に統覚の「一 (Einheit)」と直観の「多 (das Mannigfaltige)」との関係付けという仕方でカテゴリーの演繹という問題を解決しようとしている。なぜカントはこのタームを用いて問題を定式化するのか、あるいはなぜカントは問題の解決のためにはこの抽象度での定式化が必要であり、またそれによって解決が可能となると判断したのか、そしてこのタームの出自はどこなのか、というような点は従来あまり問題にされなかった。

演繹論のこの枠組みは「系列」概念を中心として構成された弁証論との対比において「一」優位のそのヘノロジカルな性格を鮮明にとらえることができる。そしてハイデガーが『存在と時間』の第2篇第6章、とくに第80節から最終節にかけて論じる通俗的時間概念としてその源泉をヘーゲルやアリストテレスの時間概念にたどられる時間概念は明らかにカントの弁証論でのこのような時間概念、あるいは〈系列〉による時間の代置との連関性を密かに持たせて造形されている。言いかえると、通俗的時間概念と対比されるハイデガーの時間概念そのものは翻ってカントの演繹論を背景としているものとみなければならない。そしてこのコントラストこそヘノロジーとオントロジーとの対決として特徴づけることができる。ヘノロジーとオントロジーとの性格の違いを、「一と多」でとらえるのか(ヘノロジー)、それとも「系列」でとらえるのか(オントロジー)、という点に煮詰めることができるという発表者の見方から、カントとハイデガーの連関は「系列」の排除と「一」の特筆という点にあり、相違は「一」の所在をどこに求めるか、という点にあるということを明らかにしたい。